



筑波山と富士山と^{*1}

Mt. Tsukuba and Mt. Fuji

西名 秀芳^{*2}

Shuho NISHINA

年を重ねてから山を歩くのが好きになって、いくつかの山を歩いている。身近な山である富士山と筑波山について書いてみる。

「西の富士，東の筑波」と呼ばれることがある。関東中心部の人々の言葉であろうが，どちらも名山には違わない。

富士山を引き合いにした伝承はいろいろな地方でよく聞かすが，「常陸国風土記」，筑波の郡の章にも，ある伝承が記録されている。それは，先祖の神様が一夜の宿を請うたところ，富士の神には新嘗の最中だからと断られたので，これを恨み「お前の生涯，雪が降る寒い山となり，だれも登らないであろう」と言い，筑波の神には新嘗にもかかわらず温かく受け入れてもらったことから，これを喜び「人々が集い，喜び，飲食物も豊かであることがとこしえに続くであろう」と言ったというものである。富士の話は今には当てはまらないが，筑波山についての神様のおつげは本物となり昔からずっと続いている。二つの山は古くから対比して語られてきたのである。

深田久弥が選定した日本百名山の中での最高峰は，もちろん富士山（3,776m）であり，最も低い山は筑波山（876m）である。彼は，百名山の選定に当り，標高が1,500m以上であることを一応の基準としていたが，文化的背景が強烈な筑波山を外すわけにはいかなかったのであろう。現在，素晴らしい山岳ガイドブックとなっている「日本百名山」の中で，この最高と最低のコンビは，「雪の富士，紫の筑波」という表現が引用され対比されている。

筑波山は見た目には独立峰と言ってよいように思う。裾野に続く稜線が伸びやかできれいだ。

「筑波富士」とも呼ばれる所以であろう。私が筑波山に登ったのは，ニリンソウが咲きほこっていた時期だった。ケーブルカーやらロープウェイを使っでは「登る」とは言えないので，筑波山神社から歩いた。標高差で700mもないので，ゆっくり歩いたが，約2時間で双耳峰の一つである男体山に到着。山頂には立派な社がある。イザナギノミコトを祭った本殿である。周囲に眼をやると，視界は良かったが広大な関東平野の先は霞んで見えない。関東では筑波山が中心であるかのように感じる。頂上までの登山道は静かだったが，頂上はすごい人出だ。ケーブルカーを使えば簡単に大展望が得られるということだ。尾根を歩いているとガマの形をした「がま石」に出会う。このガマの口は小石でいっぱいだった。口に小石を投げ込むと金持ちになれるらしい。しかし，このガマは，「陣中膏ガマの油」の方で特に有名である。「さあさ，お立ち会い，御用とお急ぎのない方は，ゆっくりと聞いておいで・・・」で始まる口上は，昔，地元の極道者が「がま石」に出会うことで考案し，多くを売り，一旗上げたことになっている。ガマの油とは，筑波山に生息してオンバコを食らう四六のガマが，醜い自分を見て流した油汗を煮詰めたものという触込みだ。内容は嘘八百だが，昔はそれなりに信じられていたように思う。自分が子どもだったころ，町の祭りの時には，刀を振り回しこの口上を語り，ガマの油を売っていた人がいた。見事な口上に，黒山の人だかりだった。そして当時は結構売れていたように思う。この口上の中に，ひび，あかぎれに効くうえ，虫歯にも効くというくだりが出てくるが，子供心に，軟膏がどうして虫歯に効くのか不思議に思ったのを覚えている。ガマの油には価値はなくても，歯切れの良い口上と大道芸には金を出す価値はある。

「がま石」を過ぎると女体山だ。頂上の大石を

*1 原稿受理 2008年1月22日

*2 (財)日本自動車研究所 審査登録センター 審査部長

またいで、「女体征服!」。女体山には、見ることの少ない一等三角点がある。さすがに大きな標石だ。ここにも社がある。イザナミノミコトを祭った本殿である。双耳峰のピークの呼び名は、南峰・北峰とかの無味乾燥な呼び名が多いが、ここでは「男体」と「女体」という粋な名前がついている。これは、大昔のカガイという風習からの発想なのかもしれない。これは、男女が春・秋に日を決めて登山し夜通し遊ぶというもの。夜も更けると適当に相手を見つけ姿を消したという。これには未婚の男女ばかりでなく、既婚の夫婦者もいた。娘はこの行事で男に見初められることが当然とされていたようだ。この事実には、「常陸国風土記」でも「万葉集」でも出会うことができる。性道徳は大らかだったようだが、今でいう合コンのようなものか? 食べ物や飲み物を運び上げ、女体山の周りで多くの男女が楽しんだ。そういえば、登山道の途中で看板があり、そこが男女川の源流付近だとして、陽成院の歌が書かれていた。

「筑波嶺の 峰より落つる 男女川

恋ぞつもりて 淵となりぬる」

これは陽成院の恋心を詠んだものであろうが、筑波山の現場で読むとまた別な味わいも感じる。筑波山は、妙に人間臭い山である。

現在、静岡県三島市に住んでいるので、富士山には何回か登っている。筑波山登山と同じ年には、山が初体験だという親戚の還暦を迎えた夫婦を案内しながら富士宮口から登った。

富士山は一般の人は夏場にしか登れない。体力的にはゆっくり登れば問題は無いが、高山病には比較的簡単にかかってしまう。新五合目までは車だが、ここで体を高所に慣らすために時間をかける。

新五合目を出発したのが15時前。梅雨明けが伸びていて明けていない。天気予報は悪くはなかったが、雲が部分的に出たり晴れたりを繰り返している。五合目以上の火山荒原には、オンタデが目立つ。この時期のオンタデは、葉が生き生きし、薄い黄色の花も美しい。還暦を過ぎた人は遅れがちだ。「大丈夫か?」、「大丈夫ではないが、大丈夫だ。」訳のわからない会話が交わされる。

この時期、登山者は多い。老若男女いろいろな人たちが登っている。登山者がこれほどバラエティに富んでいる山も例がないだろう。外人さんも結構目に付く。今日のように、登山者が急増した

ことの一因に宗教があったことは確かであろう。最初は、修験道の修行の場となり、戦国時代になると行者、藤原角行^{カクギョウ}という人が、富士山に登る事を最上と考える宗教を起こした。これが富士講という形で発展し、江戸時代に隆盛を極め、江戸では八百八講と言われた。江戸の末期の登山者が年間で三万人という数字もどこかでみた。現在、六根清浄と言って登る人は極々まれになったが、富士登山の慣習は残り、登山者数はざっとその十倍であろう。

元祖七合目に到着したあたりから雨が降り始める。大粒の雨だ。山の天気としてはよくあることだ。カッパを着る。ひどい降りになる中、18時ごろに八合目の小屋に到着。高山病対策で山小屋を予約しておいたのだ。天候が悪化したので小屋の前は黒山の人になった。しかし小屋は満員で、予約をしていないものは泊めないと冷たく言い放っている。気の毒だ。チェックイン(それほどカッコの良いものではないが)して、体と持ち物が濡れていないかどうか念入りに調べられてから、寢床に案内された。寢床がやっぱり枕一つ分の横幅しかない。ぎゅうぎゅう詰めだ。外は雨だし、覚悟を決めるしかない。夕食はまずいカレーとお茶。富士山には水がないのでお茶一杯でもありがたく思えということか。最低レベルの山小屋であるが、ここでも需要と供給の原則が働き、料金は高い。8時消灯。全く寝られない。まんじりともせず朝。6時前に出発。外は風が凄い。そして寒い。雨というよりも霧が強く吹き付けているような状態だった。九合五杓を過ぎたあたりか、少しの間、風が弱まり霧も部分的に晴れたりし始めた。

富士宮口の山頂に到着したのは8:20。霧。風は少し弱まった。それぞれお賽銭をもって、富士本宮浅間大社奥宮に参拝。実は富士山は八合目以上がこのお宮の境内なのだ。

次に剣が峰へ向かう。剣が峰はすぐそこのはずだが霧で見えない。風も強く、寒い。八月の富士山頂の平均最低気温が3度であるが、この日の体感温度は零度ぐらいに感じる。少しずつ、ゆっくり登ろうとするが、すでになんかの高度であり、酸素不足で動作が遅くなる。ついに剣が峰。登頂の証拠写真を沢山とる。お湯を沸かし、暖かなものを食べているうちに霧が晴れ始める。直径800m、深さ200mの巨大な火口が姿を見せてくれた。本当にグッドタイム

ング。登ってきて良かったと感じた。

下山をはじめお宮まで来ると、富士登山駅伝が始まっていた。折り返し点の奥宮前は混雑していて選手が次から次へ走り抜けていた。我々は死にそうな顔をして歩いているのに、すごい勢いで走って登ってくる。なんということだ。山小屋滞在を除くと往復で約12時間かかった。少し長すぎたものの、全員無事に下りることができた。

深田久弥は「日本百名山」の中の富士山について「この日本一の山について今更何を言う必要がある。」と書き始める。これには、プロの物書きの、あまりに通俗的で書きふるされた対象を前にしての心の混乱が見えるような気がする。しかし、名文である。「おそらくこれほど多く語られ、歌われ、描かれた山は、世界にもないだろう。……老いも若きも、男も女も。あらゆる階級、あらゆる職業の人々が、「一度は富士登山を」と志す。これほど民衆的な山も希である。というより、国民的な山なのである。日本人は子供の時から富士の歌をうたい、富士の絵を描いて育つ。自分の土地の一番形のいい山を指して何々富士と名づける。最もうつくしいもの、最も気高いもの、最も神聖なものの普遍的な典型として、いつも挙げられるのは不二の高根であった。世界各国にはそれぞれ名山がある。しかし富士山ほど一国を代表し、国民の精神的資産となった山はほかにはな

いだろう。」今日的な用語で言えば、富士は日本民族のアイデンティティということになるのである。このような思いは、昔から全く同じであることが万葉集でも分かる。高橋虫麻呂の歌にこうある。

「……………日の本の 大和の国の 鎮めともい
ます神かも 宝ともなれる山かも 駿河なる
不盡の高嶺は 見れど飽かぬかも」

現在、富士山を世界遺産に登録する運動が行われているが、是非とも実現してほしいと思う。

二つの山は、姿が秀麗であるとか、古来より多くの人に登られてきたとか、文化的側面が豊かであるとか、象徴的存在である、など共通点が多い。自然環境の面でも、文化的側面からも、日本人の我々が後世に引き継ぐべき超一級の資産である。

前記の長歌に対する反歌に

「不盡の嶺に ふりおく雪は ^{ミナヅキ} 六月の
^{モチ} 十五日に消ぬれば ^ケ その夜ふりけり」

とある。富士の雪が消えるのが6月中旬ということだ。地元の人間としては、現在の暦を念頭に読むとそれほど違和感はないが、万葉の昔の暦は1ヵ月以上ずれていたであろうから、現在の暦では7月下旬ということになろう。人間の活動で既に気候を大きく変動させてしまったようだ。資産を残すにもやるべきことは多そうだ。